

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

號九四三第・日九廿月一十輯編局報情

眞實週報

神州の正氣
 シイテに炸裂す
 あゝ陸軍特
 別攻撃隊
 皇國
 斷じて揺がす

愛媛の民衆に盛衰富士と雷を轟く
 富嶽飛行隊員 撮影 寺野朝雄隊員



石丸を期に陸軍特別攻撃隊

十一月十三日の大本營發表は、我が特別攻撃隊萬葉飛行隊の第一陣が十二日朝、比島レーイア湾内の敵艦艇を攻撃し、必死必殺の奮闘を以て、敵艦二隻、輸送船二隻を撃沈した。壯烈なる戦果を中外に明らかにし、續いて翌十四日の大本營發表は、萬葉飛行隊の第一陣が十三日の夕刻、ルソン島東方海面に敵機動部隊を捕獲し、同じく奮闘を以て敵艦二隻を同時に撃沈するの偉勳を擧げたことを報じた。

まさに海軍の神風特別攻撃隊の出陣あり。

今また武々林の如き静けさで待機してゐた隊員の特別攻撃隊、萬葉、富嶽兩隊飛行隊の出陣の報に接して、銃後一線の感動、感涙は言語に絶するものがあつた。その感涙、あの感動こそは、恐らく如何なる文筆者といへども、これを文字に表現しつくせぬほど大きく且つ深いものであつたらう。

と同時にまた、陸海の若輩が渾然一體となり、必死必中、必死必殺の特別攻撃隊として、決然と出陣した事實を聞いて、比島方面における陸海空の激戦が皇國の興衰を決すべき重大決戦であることを今更の如く感ぜし、身の

引張り血の逆流するを覺えたものもあつたと思ふ。

特別攻撃隊の出陣がなほゆまにかくも銃後國民の心底を揺さぶり、その阿鼻を掻きむしつたのであらうか。

それは彼等の出陣に「生還」がなく、彼等の攻撃が即ち死を意味するからである。

人間としての一切の名利を捨て、人間としての一切の情みを克服し、死を越え生を越えて彼等若き輩が、ひたぶるに求めんとするものは何か。

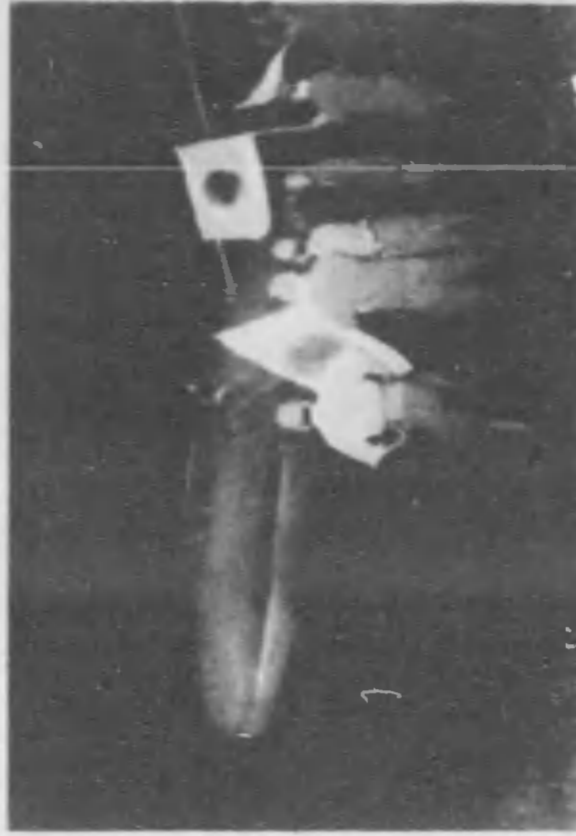
彼等は名をこそ惜しめ、その名をすら顧



田中吉一

生田豊

佐々木



〇 陣について講話

出陣を前にして彼等若輩を語る萬葉飛行隊長西島少佐(右から)と田中少尉(二人おいて来野少尉)

みず萬葉の櫻花の如く敢然と故つてゆく若輩が、一途に求めんとするものは何か。

それは「日本の勝利」である。

存亡の岐路に立つ皇國を、富嶽の泰きにおかんがための勝利である。その勝利の礎石となるために、彼等は従軍として「體當り」し、決然として「必死必殺」の強襲を行つてゐるのである。

二

神風特別攻撃隊 將兵委今燃然

一身燃然大任重 不怖死徒不求生

これは比島方面陸軍航空隊指揮官荒木中將が、萬葉飛行隊の出陣に當つてその壯意を説いた時である。「死を怖れず、しかも徒らに死を求めず」の一句こそ、我が特別攻撃隊員の心境であらう。また菅原陸軍航空隊長は「萬一出陣しても、敵を發見できなかつたり、或ひは發見しても體當りするに不適当な運物であつた場合には、深く其地に歸つて来い。斷じて死に念きをしてはならぬ」と訓した。

からした親善連の月頃の訓育は、既に死を決心してゐる若輩達の心を一層清浄なものに高め、同時に心の修飾を興へもし、敵軍一掃

〇 彼等若輩に無名空襲に付れた大本營からの遺言を以て、今更しく萬葉飛行隊長(右)つて右から久保軍曹、田中軍曹、生田軍曹、佐々木本隊長) 報載 毎日新聞社



の突撃をして快心のものならしめてゐるのである。

それゆゑに萬葉、富嶽、八嶽等の陸軍特別攻撃隊の隊員達の出陣には、一筋の興奮も一片の精爽もない、まことに淡々たるものであつた。しかも一たび戦場上空に發射するや、彼等の職業的任務を仰びて行を共にした新司令官や、訓練機関の搭乗者の目撃証によれば、一機また一機と雲間から敵艦艇がけて真一文字に、爆撃機としては到底成へられないやうな急降下を続け、機身一如、身弾一體の體當りを敢行した。その開戦爆發の神妙しい姿には、思はず熱涙の滾るを禁ずることができなかつたといふ。

三

想ふに萬葉隊といひ、富嶽隊といひ、特別攻撃隊全員を貫く體當り精神は、全陸軍の將兵を貫く精神である。

とアク島沖で敵艦艇と刺し違へ、全機體當りを以て突撃した高田戦闘機隊、或ひはカ1・ニコベル諸島沖で東機英空母に體當りして一機に撃沈した阿部信弘中尉、北九州侵入のB2に體當りした野澤軍曹、印度洋上の我が無敵艦を撃つた敵艦艇に體當りして危

命を救つた石川清雄中尉、更にはガラルカナル島の犬野挺進隊をはじめ、サイパン、アモラン、大宮、ペリリニ、モロガイ等々の島嶼戦にかられる内海新込挺進隊……これら陸に空に海に敢行されてゐる體當りは、いづれも皇軍獨特の精神力を以て、物質の量火に酔ひしれる敵を撃倒し去らんとする陸軍魂の強靱にほかならぬ。

レイテ島の戦雲いよく滾く、皇國は今やまさに興廢の岐路に立つ。祖國の存亡を突破せんと思ふ熱血火と燃ゆる陸軍特別攻撃隊は、奮然とした。萬葉、富嶽、八嶽……と後から後から陸軍と決戦場に赴かんとする昭和の楠公の雄々しい姿！

われこそは必死必殺を期する全軍の先鋒たんと拚争く幾百千の楠公！

あ、われもまたこの特攻精神を體して銃後の使命を完遂し、この決戦を闘ひとらう。

岩本高次郎中尉

大君の勅かしく今日よりは

大陣とかかりて吾は征くなり

武夫はちるもめでたき櫻花

花をも春をも人を知るらむ

大本營陸軍報道部

二の戦=禍惨の二



本月一日から三日が本土上空に侵入した。その足取りからみて、恐らくはわが重要地区を襲う予備隊に違いない。わが本土が敵の機群に侵入した以上、敵の本格的な爆撃の時期が目前に迫つてゐることはいふまでもない。

もちろん敵の本格的な爆撃がどの程度のものであるかは推定できないが、敵機の襲撃によつて国内にある程度の被害を蒙することは想像される。この被害の甚だしいところは、敵の非人道的な狙ひもまたそこにある。

去る十月七日、敵の機群による神奈川県の被害は、敵は神奈川を無差別爆撃により焼夷、焼夷弾の雨を降らせ、大火に燃え上る市民には航空から焼夷弾射撃を加へ、遂に神奈川市を占有し、市民二百名を殺傷した。航空爆撃下の被害は、さびはこれの象とも思はれぬ。敵の狙ひを現出したと推定される。

都市の無差別爆撃の被害についてわれわれはたゞく聞かされてゐるところであり、敵の無差別爆撃についても知り得てゐる。だがこの際、敵の空襲の責をどうと身近かに感得する必要がある。敵が爆撃しようとするのは、われわれの家屋であり、財産であり、生命である。

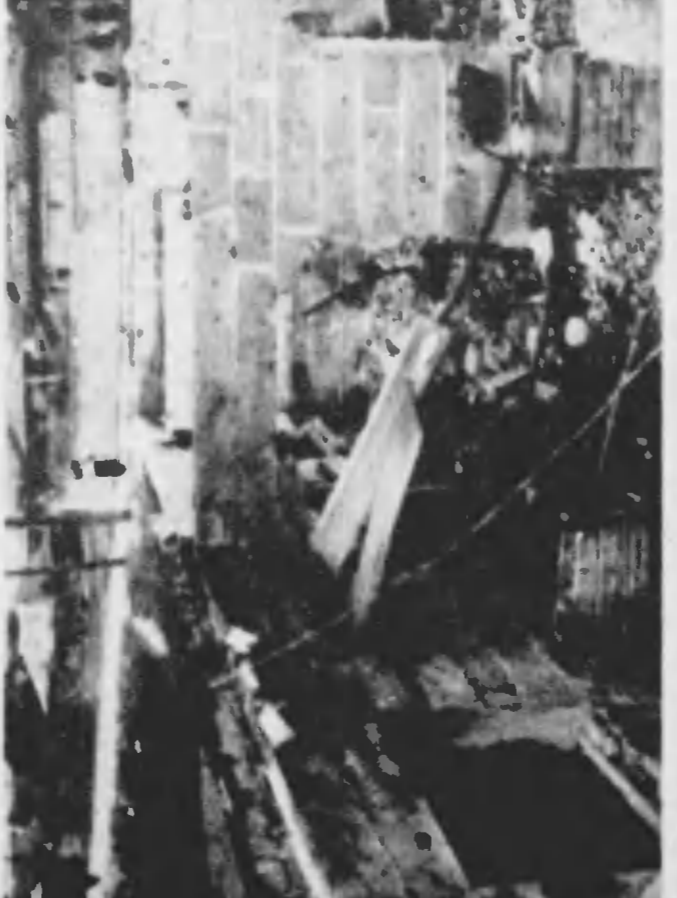
敵はわれわれを国民としてゐる。われわれは敵をこれと闘はねばならぬ。しかも、たとへば、財産を失ひ、或ひは生命を失ふとも、最後まで神奈川を堅持し、戦心と、戦争遂行の戦意を失はねば、勝利の兆きはわれに歸することを深く心に期す。かく考へると、敵空襲の矢面に立つわれわれ国民の心算へと準備は十分だろうか。開引と疎開、待避所の増設、老幼婦女子の疎開など、われわれに負はされてゐる被害は、まだ多く多い。

本土がこれに、敵が神奈川市に行つたのは、これをまさしく示す真実を暴露した。これによつて国民が敵空襲の責をどうと感得し、これにこれらの課題を解決し、戦争遂行に全力を注ぎたいことを期してゐる。

一情笑の襲空覇那



敵の無差別爆撃の五層がこれだ。だが、敵方の爆撃は、わが重要地区を襲つてゐる。市民の被害は、さびはこれの象とも思はれぬ。敵の狙ひを現出したと推定される。



敵空襲の被害は、さびはこれの象とも思はれぬ。敵の狙ひを現出したと推定される。





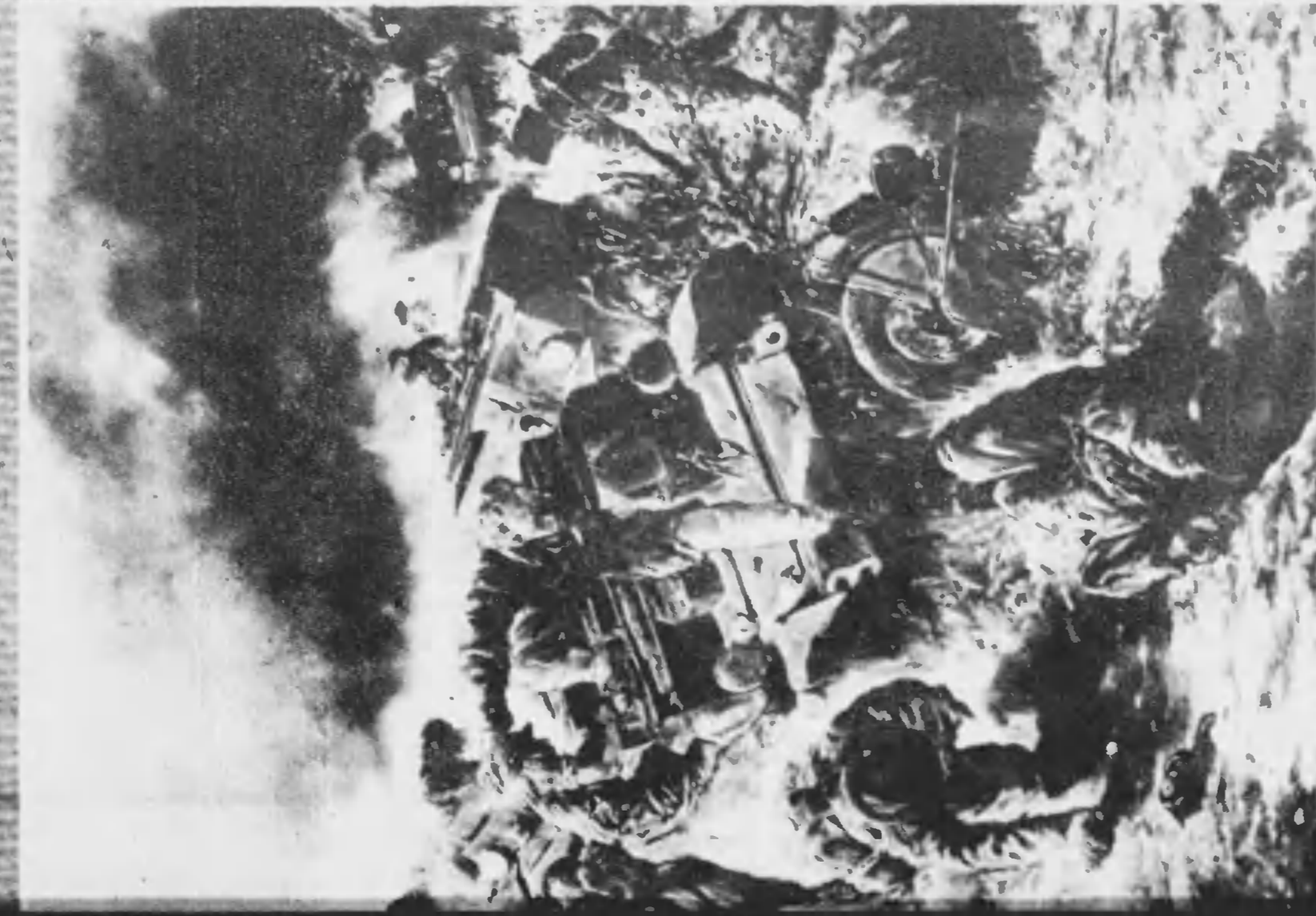
大

結實勇猛

《軍用車隊作戦時》 戦況写真大冊

集印本堂

子父本繪



上原作中 戦況写真大冊



月桂林秋

空入集賦

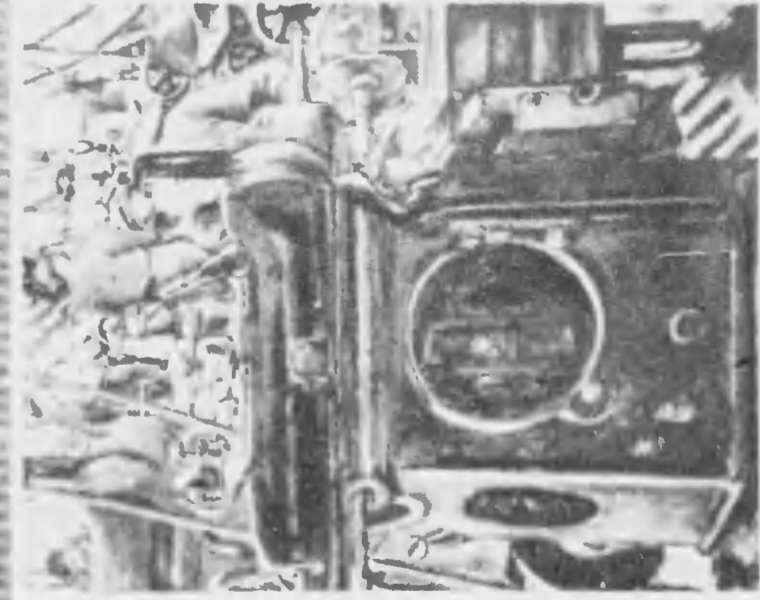


菊池野村

國語集



野空集



子規川集

工場の下町決



岸波集々多

今人く徳に所評選



延為川中

國語内政

省文部特別戰時美術展覽會

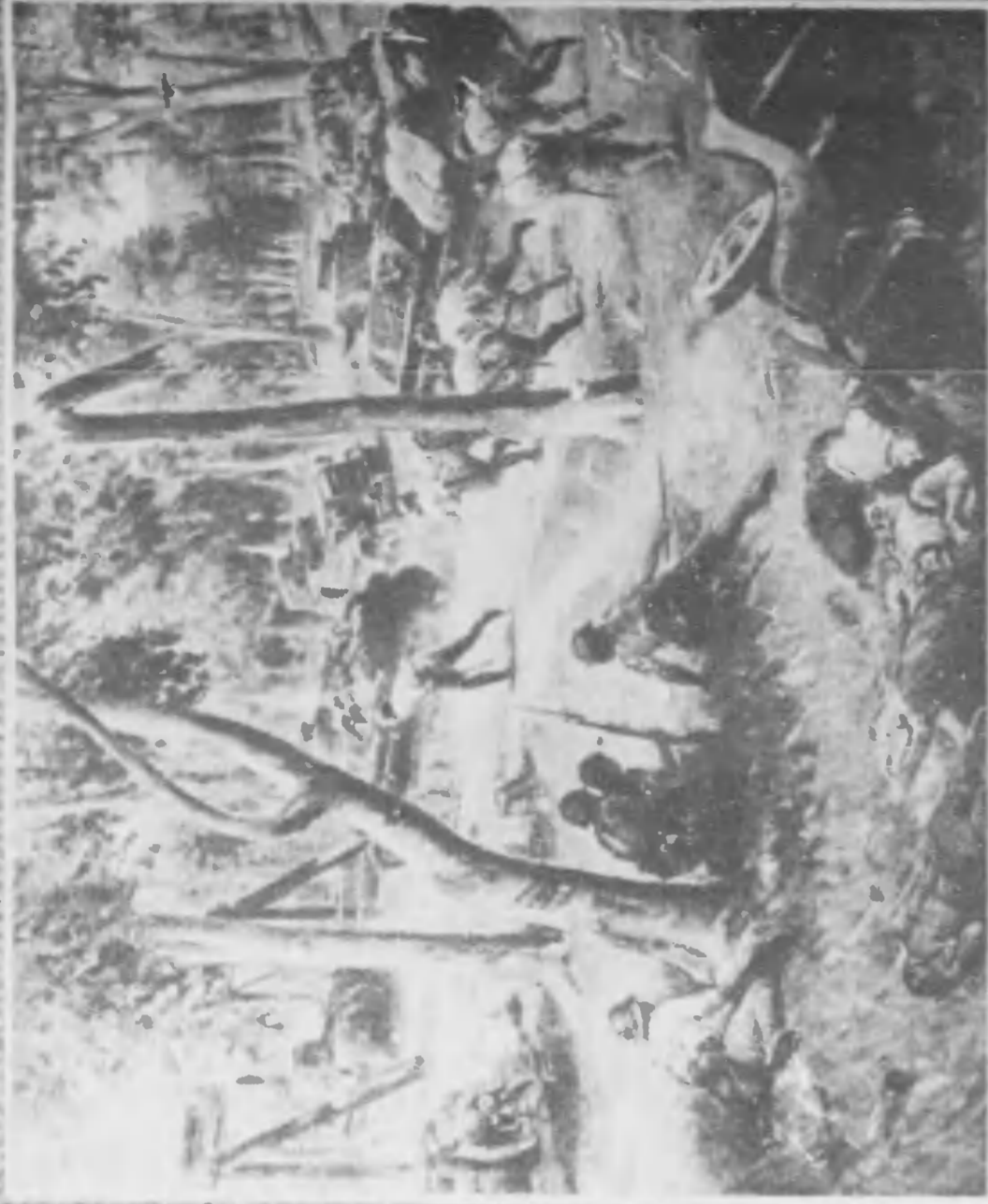
期會 自 日 五十二月一十 日 五十二月二十

文部省戰時特別美術展覽會は、十一月二十五日文部省主催美術展として初めての戦時美術展開会式を以て、東京皇土野公園内の東京美術会館で盛大しく開会された。各省各道が何れもこの機会に力をこめて出品する所は、戦時下の美術の繁栄をうかがふに足るべきである。各省各道が何れもこの機会に力をこめて出品する所は、戦時下の美術の繁栄をうかがふに足るべきである。各省各道が何れもこの機会に力をこめて出品する所は、戦時下の美術の繁栄をうかがふに足るべきである。





三木 隆 三木隆の軍旗 (三木隆の軍旗) 三木隆の軍旗



三木 隆 三木隆の軍旗 (三木隆の軍旗) 三木隆の軍旗



三木 隆 三木隆の軍旗 (三木隆の軍旗) 三木隆の軍旗



三木 隆 三木隆の軍旗 (三木隆の軍旗) 三木隆の軍旗



信 原 信原 (信原) 信原 (信原) 信原 (信原)



三木 隆 三木隆の軍旗 (三木隆の軍旗) 三木隆の軍旗



三木 隆 三木隆の軍旗 (三木隆の軍旗) 三木隆の軍旗



三木 隆 三木隆の軍旗 (三木隆の軍旗) 三木隆の軍旗



天快先生

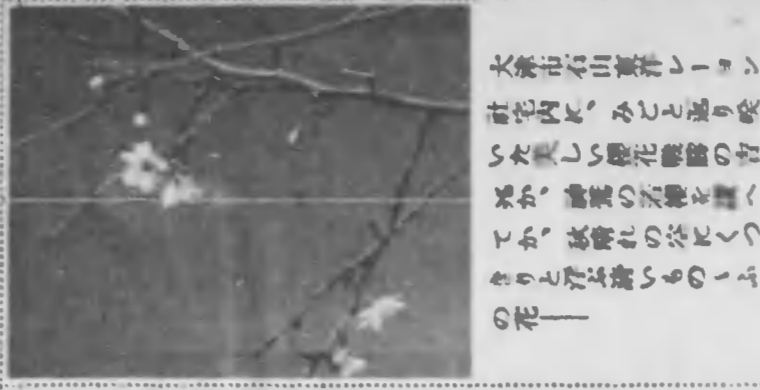
天快先生は、白い息を吐いた。二三日前から雨が降りはじめ、朝はなかくに寒い。困ったことが流行りだしたもんだ。天快先生は、白い息と一緒につぶやいた。「言葉といふものは、もつと尊重せんといかん」。天快先生は、裏木戸を開けて、空庭に出た。空庭には、隣組の若い連中が七、八人朝の體操をこなしてしばしの體操中だ。天快先生の耳に届いたのは、この雑談なのだ。リウウケンヒョウ、そんなものではない。この頃、町に流行してゐる遊藝、即ちさかさま遊藝なのだ。酒をケイサと連にして留且つ妙にひらばつて唱へ、ビールをルビーといふ如き言葉だ。にくい奴といふのを、くにくい奴だね。一寸聞いたんじや何のことだかさっぱりわからない。「そりや、かいたアだな」と言へば、それは高いといふことになるといふんだから、老若天快先生でなくても、呆れかへらざるを得ない。いやな流行だ。

「みなさん、お早う」
天快先生は寝をかけた。「おいだアむいさになつたやね、先生」
「水が寒いと言つてるのだとはさつたが、天快先生はすましたもので、てんでとりあはない。そのうち若い連中の一人がポケットから赤いタダモノを一つ出した。「ほや、めづらしいものを持つてるね」と天快先生。「どうです、このごりんは」とその男が言つたと同時に、天快先生は、たもとから一錠玉を出して。「五厘とは安い。ゆづアて買はら、釣はいらん」と、さささとリンゴを掌に受け、あつげにとられてゐる相手に一錠玉を渡して。「こみやのほくせい、せむたのりもに、びそゆるらいかは、れわがらがこぼら、知つてるかね、都の西、北早稲田の森にだ、昔もこんなつまらん流行があつたのさ。よしたまへよ。言葉は大害にしたまへ。五厘とは安い、五厘とはありがたい」と、さささと水戸を押してわが深く入つてしまつた。



買ひ出し
小泉 葉蘭
工場の中を歩くと、職員を背負つて、異常な人分占領してゐるこの男は、どろりとした目つきだ。

風の聲が
秋 玲二
空襲警報解除後の風景



大津市石山町レリオン町宅内、みごと走り回つた美しい櫻花露の音地が、神聖の香を醸へてか、秋晴れの空にくつきりと浮ぶ涼しいものよ、花

「一種の情で暮らぬから、戦局は正に真潮の興衰を決する戦の決戦段階に突入しつゝ、故に聖戦三周年記念日を迎へます。此期にはまりない皇軍将士の奮戦によつて、絶えたる戦線は断つてゐますが、物事に勝つては即ちか

ても叩かれても必死の反撃を続け、決戦に大く決戦の戦隊中です。今こそ一種の情を必勝増進の一助に打込み、飛行機をはじめ、あらゆる兵器をどしどし第一線に送りませう。神風特別攻撃隊を始め、幾多の犠牲り勇士の犠牲を以て生かすのは今です。「飛行機を恐れ」と叫びつゝ、連年の人柱とならば勇士の表現に値するは今です。

一、一種の情を必勝増進に
必死必中の犠牲りに願つて、精神と肉体を鍛へて、武器を作りませう。今日の決戦に間に合せるため、軍徳品の生産や輸送に當る人々は、犠牲り精神でこの戦末も最後まで頑張りぬませう。

二、一種の情を必勝増進に
食糧の確保は勝つた後にも必要です。農山漁村では、一層食糧増産の決意を固め、特に農村では各の手入れと増産の増進に全力を注ぎませう。

三、一種の情を必勝増進に
敵は空襲によつて、後方の視界を阻つてゐます。防空の備へをいよいよ周到に固め、訓練も形式に流れず、真摯な心持で、心のゆくまで行ひませう。

四、一種の情を必勝増進に
一億総友愛で結び合ひ、道義心を以て、無道無義を生かして物の消滅をせよ。また日常生活を通じて、強靱な身体に鍛へあげ、決戦生活を正しく闘つて生きて行ひませう。

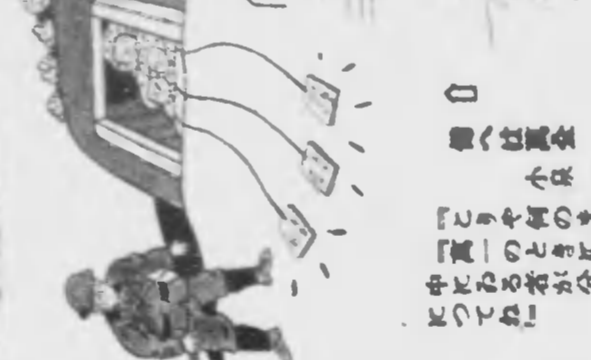
五、一種の情を必勝増進に
決戦貯蓄は四百十億円に増加されました。一層勤勞にげんみ、間に合せを断絶し、年末の臨時収入は貯蓄により向け、現金は出来るだけ手持ちを減らすにしませう。

この党音は今年最後の党音です。一年間の党音を深く反省し、さらに一層の勤勞公にはげませう。

弾丸兄弟 横山 隆一 37



弾丸兄弟
着望 無解 証
「よう、見える！」「でも、外は待機中、わかる」



「何と直らんかね」「さあ、ねえ」
「……(彼は驚愕)」
「何と直らんかね」とさういつた場所の電球は、バの開けたため、電球が落ちて自然にゆるんできます。それで時としてスイッチを入れてもつかぬことがあるから、一應ひねつてみる必要がありまふ。わかつてみれば何でもないことですが、ラジオの感電なども同じ理由で、ゆるんで聞えなくなることもありますから、よく注意して下さい。

国民合唱
「明くる東亞」
元氣に、行進の調で

詞 尾崎士郎
曲 高田繁
作 高田繁

明くる東亞

明くる東亞の朝
朝もかき日影
正徳のひかり照ると
天照らす女も笑顔
運命なまひて早や四年
御機嫌がさし四方の港

一
二
三

明くる東亞の朝
朝もかき日影
正徳のひかり照ると
天照らす女も笑顔
運命なまひて早や四年
御機嫌がさし四方の港